

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、17 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 先生は落ち着いた挙措でいた。
- (2) 商店街で鼓笛隊が演奏していた。
- (3) 若人の集いが行われた。
- (4) 友人と話して心が和んだ。
- (5) 役所からタイチヨウした。
- (6) 昨年、ハ克蘭カイが開催された。
- (7) ヒントからカツロを見いだすことができた。
- (8) 海岸線にツって走る。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

二十二歳の斗羽風汰は、保育士をしている。その保育園には、園長をはじめ、中込、坂寄、二宮、井浦茉莉絵が働き、五歳児の芹香、四歳児の翔真、萌、明日奈、三歳児の琉生、一歳児のノコちゃん、〇歳児の拓士たちが通っている。夕方、風汰と中込は、芹香、翔真、萌、ノコちゃんたちを連れて散歩に出かけた。本文はその後が続く場面である。

園の周りをぐるっと一周して園に戻ると、子どもたちは洗面所へ直行した。

「これもって。」と、翔真君は握っている数本の猫じゃらしを風汰に渡した。ぶくぶくと泡を立てて指の間まで丁寧に洗う。茶色い泡になったと笑ったり、泡に息を吹きかけたりしている。

「きれいになった！」と、戻って来た翔真君に猫じゃらしを返すと、足音を立てて保育室へ駆けて行った。留守番組の子たちにお散歩の収穫物を見せびらかしに行ったのだろうと思っていると、「おみあげ！」と翔真君はブロックをしていた琉生君とぬりえをしていた明日奈ちゃんに一本ずつあげていた。

(1) こういう男がモテるんだろうな、将来。と風汰は額を搔いた。

しばらくすると調理室からご飯の炊ける甘い匂いがしてきた。夕食までの時間は、少し落ち着いた雰囲気になる。奥の畳の部屋で翔真君と琉生君は新聞紙を巻いてハッシュレンジャーの剣づくりに夢中になっているし、明日奈ちゃんはごろんとしながら絵本を開いている。萌ちゃんと

芹香ちゃんは色鉛筆で絵を描いて、拓土君は中込からミルクを飲ませてもらっている。

それぞれが思い思いに過ごしているなかに、早番の保育士二人が入っている。

風汰はバンダナを頭に巻くと、保育室に折りたたみ式の長テーブルを三台開き、二台のテーブルにイスを並べていく。もう一台は配膳台として廊下に近い場所に設置する。三台ともにテーブルの上をアルコールで消毒し終えると、廊下をはさんで向かいにある調理室の窓を開けて、「準備オッケーっす。」と声をかけた。

カウンター式の配膳棚の上に、おひつと煮魚が並んだ大皿がすでに置いてある。

「ありがとうございます、じゃあ運んでください。」と、園長が鍋を配膳棚に置いた。

夕食の調理は主に園長が担当している。

「りようかい！」と、風汰は、おひつ、けんちん汁の入った鍋、煮魚の盛られた大皿とキュウリとわかめの酢の物が入ったボウルを保育室へ運び、イスを置いていない長テーブルの上に横一列に並べていく。すると、絵を描いていた芹香ちゃんが色鉛筆をケースに入れ始め、萌ちゃんもスケッチブックを閉じた。その向こうにいる明日奈ちゃんも絵本を本棚に戻している。

ここで働くようになって風汰が最初に驚いたのはこれだった。実習に行った園では保育士が大きな声で片付けを促したり、音楽を合図に次の活動を促していたが、ここでは、散歩に行くときも、食事のときも、保育士が全員に向けて一斉に指示をすることはほとんどない。

新人だった風汰が驚いていると、坂寄はなんでもないことのように言った。

「だいたい你的生活リズムは子どもたちもわかってるからね。小さい子も大きい子たちが準備をし始めれば、ごはんなんだなってわかるし、靴下を履いたり帽子をかぶっている子がいたらお散歩に行くんだってわかる。保育士は周りにいる子ども一人か二人に声をかけるだけで十分なの。」

少人数だからできることもかもしれないけどね、と坂寄は付け加えたが、⁽²⁾風汰の目にはまるでマジックのように映った。

「ふーたせんせい、まだあ？」

目の前に萌ちゃんと明日奈ちゃんがトレーを持って立っている。

「ごめんごめん、はい、ごはんどれくらいにする？」

「ちよつとすくなめ。」

「じゃあ、ひと口ぶん減らすか。」

風汰は気持ち少なめにごはんを盛り、「はいどうぞ。」と萌ちゃんのトレーにのせた。

「明日奈ちゃんはどれくらいにする？」

「うんとね、いっぱい。」とけらけらと笑う。

「よし、大盛！」

ごはんとおかずは、三歳くらいになるとこういうやりとりをして保育士がよそい、それを子どもたちがおのおのテーブルに運ぶ。調理室で手伝いをしていた坂寄も戻ってきて、おかずの煮魚、キュウリとわかめの酢の物も同じように大きさを量を聞きながらよそう。保育士がテーブル

に配膳をするのは、汁物と麦茶、それから年齢の低いノコちゃんの食事だ。今日はそれらを中込が手際よく行っている。

六時を少し過ぎたところで「いただきます。」をして夕食になる。食事中、一歳児のノコちゃんには二宮がマンツーマンでつき、おかわりや片付けのサポートは中込、もう一人の早番保育士、井浦茉莉絵は奥の和室に子どもたちの布団ふとんを敷いていく。遅番の風汰と坂寄は子どもたちといっしょにテーブルについて食事をする。

「風汰先生は全部大盛ね。」

トレーの上を見て二宮が言うと、子どもたちは大きな口を開けて笑う。口の中が丸見えだ。

「食つてるときは手を当てる。」と風汰が言うと、「くっつてるじゃないよ、たべてるだよ。」とまた芹香ちゃんに注意された。

「はいはい、食べているときは手を当てる。」

そういえば芹香ちゃんみたいな子がエンジェル保育園にもいたな、とふと思いだした。昨日、林田と再会したせいだろうか。

中学生のときの職場体験はたった五日間だったけれど、一日一日がやたらと長く感じて、体験先に保育園を選んだことを心底後悔しまくった。そんな自分がまさか保育士になっているとは……。人生ってのはつくづくわからない。

(いとうみく『蒼天のほし』による)

〔問1〕⁽¹⁾ こういう男がモテるんだろうな、将来。と風汰は額を搔かいた。

とあるが、風汰はなぜそのように思ったのか。その説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 散歩から帰ってきた翔真が、洗面所で手洗いをしている時にふざけて泡で遊び始めていたから。

イ 散歩から帰ってきた翔真が、留守番組の子たちに自分でつんだ猫じゃらしをおみやげとして渡していたから。

ウ 散歩から帰ってきた翔真が、無邪気な態度で留守番組の子たちに猫じゃらしを見せびらかしていたから。

エ 散歩から帰ってきた翔真が、留守番組の子たちから注目を浴びようとして、散歩中に猫じゃらしを摘んで準備していたから。

〔問2〕⁽²⁾ 風汰の目にはまるでマジックのように映った。とあるが、な

ぜ風汰には「マジックのように」思えたのか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 子どもたちに誰も声をかけなくても、次に何をするのかを全員が理解して、状況に合わせた対応をすることができるから。

イ 子どもたちは坂寄を信頼していて、坂寄の音楽による合図の後のどんな指示も受け入れ、動いているから。

ウ 子どもたちが一日の生活リズムを把握し、先生たちに怒られないように、次にやるべきことを必死に考えて行動しているから。

エ 子どもたち全員に向けて一斉に指示しなくても、食事の準備が始まると、子どもたちが状況を理解して動き始めるから。

〔問3〕 本文に描かれる風汰像として最も適切なものは、次のうちではど

れか。

ア 子どもに指摘されるような多少くだけた言葉遣いではあるが、保育士として子どもたちとコミュニケーションをとって、仕事に対応できる人物。

イ 子どもたちに対して優しさは見せながらも同僚に対しては無骨な言葉遣いにより、仕事においてうまくいかない部分があり、周りに心配ばかりかけている人物。

ウ 周囲に気を配ることができると丁寧な言葉遣いで、子どもたちからも同僚からも信頼され、リーダーシップを発揮して園の中心として活躍している人物。

エ 素っ気ない態度と言葉遣いで子どもたちに接しているが、冷静沈着に保育士の仕事に熱意を持って取り組み、着実に実力をつけてきた人物。

〔問4〕 次の会話は、昨日、林田と再会したせいだろうか。とあること
に対して、「林田とは誰か」と生徒が先生に質問した様子である。
会話文中の〔X〕、〔Y〕に当てはまる最も適切なものは何か。
ただし、〔X〕はあとから選べ。〔Y〕は【資料】中から一語
で抜き出せ。

生徒A…先生、ここで出てくる林田とはどんな人ですか。

先生…林田は、風汰が中学校時代の職場体験で行った保育園で先生を
していた人です。実は、本文の前の場面で電車の中で再会して
います。そのときの場面を【資料】で見せますね。

【資料】

「それにしてもびっくりだわ。」

「そつすよね、偶然っていうか。」

「じゃなくて。」と、林田は小鼻をふくらませた。

「きみが保育士になってるってこと。」

ああ、と中学のときの職場体験を思い出して風汰は肩をすぼめた。
あのとき風汰が体験先に保育園を選んだのは、保育に興味があった
わけでも、子どもが好きだったわけでもない。単に、子どもとあそ
んでいればいいだけのラクな職場だと思ったからだ。ところがその
思惑は見事にはずれた。子どもたちはうるさい、きたない、しつこ
くて面倒くさい。そのうえ、担当保育士の林田にはこき使われるし、
怒られるしと散々だった。

「斗羽君のあとも、毎年、職場体験の子たちが来たけど、斗羽君は
ダントツだった。」

「マジっすか？」

「とんでもなさがね。」

生徒A…風汰が保育士になったことに驚いていますね。

生徒B…本文にもある、風汰が職場体験で保育園を選んだことに対する
後悔も、【資料】を読むとより分かりますね。

生徒A…林田先生はとんでもない風汰が先生になったと思ってるんで
すかね。

先生…どうですかね。林田先生は【資料】のすぐ後の場面で、〔X〕
というようなことを言っています。

生徒B…ということは、とんでもなさかダントツだったとは言いなが
ら、子どもたちの反応を見て、風汰に保育士としての資質があっ
たことを分かっていたのかもしれないね。

先生…風汰が保育士として働いていることを知って、職場体験のとき
の風汰を思い出して言ったんでしょね。

生徒A…だとすると、林田先生は風汰が保育士になるかと思ってい
たんですかね。

先生…それは分かりません。

生徒A…風汰は何かきっかけで保育士になろうと思ったのかな。

生徒B…風汰は中学生の時、職場体験に安易な理由で保育園を選んで
います。けれど体験してみると〔Y〕とは違ったと思っていま

す。中学校の時に選んだ理由との変化を調べてみるのもおもしろいかもしれません。

生徒A…この後の場面を読んでいくと、もっとわかることがあるかもしれませんね。この後の部分も読んでみようと思います。

先生 …林田との出会いから色々と考えてことができましたね。もっと深く読んでいけるといいですね。

X
の選択肢

ア 風汰が保育士になって不安だな

イ 職場体験で保育士の仕事の良さを体感できたからだ

ウ 実習先の子どもたちは風汰が好きだった

エ 中学生の頃抱いた夢を実現したのは素晴らしい

〔問5〕 本文の表現の特徴について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

は、次のうちではどれか。

ア 風汰の頼りない部分を描くために、粗雑な言葉を多く用いた発話にしている。

イ 擬音語や擬人法を多用することで、子どもらしい行動をわかりやすく伝えられるようにしている。

ウ 子どもたちの話す言葉をひらがな表記にしたり、長音を用いたりして、幼さを表している。

エ 保育園での出来事を、日常の一場面としてリアルに伝わるように、誇大化して表現している。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

(1) (一)趣味判断「このバラは美しい」と(二)論理的判断「バラというものは一般に美しい」の違いについて見ていきましょう。この場合、違いそのものは非常に単純です。

論理的判断の場合、「バラというものは美しいものである」という一般的な概念が前提になっています。その人が何度もバラを見てそのような概念を形成した場合もあってしょうし、一般にバラというのは美しいものの象徴ですから、世間からその概念を受け取ったこともあるでしょう。

それに対して、「このバラは美しい」という判断は、あくまでもこのバラに対して下されるものです。美しい対象は常に個別的であり、その人がはじめて出会った対象です。それまでに何度もバラを目にしたことはあっても、今、ここで出会ったこのバラは個別的であり、その人にとってはじめて出会った対象に他なりません。ですから、「美しい」という判断は概念を前提にできないのです。

概念を前提にしているか否か。これが(一)と(二)の違いです。美についての判断は、美しさとは何か、何が美しいものかを説明する概念を前提にしないところに最大の特徴があります。

しかしここに一つの謎が生まれます。概念がないということは、何らの規則もそこに前提できないということです。つまり、

ということ

す。にもかかわらず、我々は「美しい」という判断を下し、その判断に誰もが同意することを確信し、しかも、大抵の場合には美しいものには普遍性があるわけです。

もちろん、大抵の場合には美しいものに普遍性があるとはいっても、美しいとされている対象をかき集めたところで、美しさの条件が得られるわけではないし、我々はそのような条件を学んだから美の判断を下すわけではない。

これが美しさの謎です。たとえば^{*}プラトン^{*}だったら、僕らがこの世に生を受ける前に、^{*}イデア界^{*}において美のイデアを見ていたからだと言明するでしょう。今ではこのような考えを真に受ける人はいません。しかし、イデアのようなものを前提せずに、どうやって先の謎を解けばよいのでしょうか。イデア界の实在は信じないとしても、美の本質のようなものがあると考えなくなるのは少しもおかしなことではないのです。

イデアに頼ることなくこの謎に果敢に取り組んだところに、『^{*}判断力批判^{*}』のすごみの一つがあります。カントは個人的な判断が、それを超えた普遍性を要求するものにまで高まる仕組み、まさしく、高次の能力が発揮される仕組みを解き明かそうとしたわけです。

この仕組みの中で大きな役割を果たすのが構想力と悟性です。カントは人間の心を、感性、構想力、悟性、理性という四つの^{*}アクター^{*}が働く職場のようなものと考えました。その時その時の仕事に応じて、これら四つのアクターの役割が変わります。特に、⁽²⁾どれが主導的役割を果たすかが変わります。美の場合は、⁽²⁾構想力と悟性が主人公というわけ

構想力というのは想像力、イマジネーションのことです。カントの邦訳では伝統的に、「想像力」ではなくて「構想力」と訳されてきました。

「構想力」という言葉の力強さが、カントがこの言葉に込めたニュアンスをよく伝えているからではないかと思えます。

カントは、構想力のことを、現前していなくともその対象を直観する能力だと言っています。これは僕らの想像力という語の使い方にも一致するものでしょう。たとえば、未来を想像してみるというのは、目の前にない未来を、目の前にないにもかかわらず、何らかのデータとして受け取ることを意味しています。そう考えると、構想力というのはすごい能力です。存在しないものを存在させてしまう魔法のような力です。人間にはこの魔法のような力が備わっているのです。

悟性は日常語ではなじみのない語ですが、英語では「アンダースタンディング」と訳されます。理解力のようなもので、概念的思考を担当しています。概念的思考とは、対象を概念として把握することであり、概念として把握するとはそこに何らかの規則性を見いだすことを意味します。

たとえば、たき火に近づいて熱いと感じた時、熱い炎に近づいたから熱いのだとこの事態を理解したならば、その人は原因と結果という因果性の概念を用いていることとなります。この具体的な経験の中に、規則性を見いだしているわけです。

しかし、そのようにして経験を概念化するためには、ナマの経験のままではだめで、これを概念にうまくフィットするようなものに変えなければなりません。現実の経験はあまりにも複雑な要素を無数に含んでお

り、これをたとえば因果関係という概念に当てはめるには、何らかの形式化が必要なのです。

この形式化を「図式化」と言い、カントによれば物事を認識する際、構想力がこの図式化を担当しています。なぜ構想力がこれを担当しているのかというと、多様な現実を概念で扱えるようにするためには、既知の概念の手前で、現実にははめる型のようなものを毎度作り出さなければならぬからです。整理の仕方を考えるととってもいいかもしれません。

ここで、構想力もつ、目の前にないものを作り出す作用が大きな役割を果たすというわけです。構想力は、悟性が現実の表象をうまく扱えるように、悟性の方を向いて、悟性のことを考えながら、この図式化という作業を行っています。カントは³⁾認識のメカニズムをこのように説明しました。

いま、認識においては、構想力は悟性の方を向いて、悟性のことを考えながら、図式化を行っていると言いました。つまり、主導的な役割を果たしているのは悟性です。構想力はこの場合、上司がプレゼン*で使う資料の整理を任せられ、上司がプレゼンをやりやすいようにそれらをレポートにまとめている、そんな上司想いの部下のようなものです。

ところが、しばしば、この構想力と悟性の関係が一変する不思議なことが起こります。見たこともない素晴らしい対象に出会った時、構想力が悟性から頼まれていたわけでもないのに、悟性の都合など考えもせず、その対象に引き込まれ、それについて省察を続け、その図式化を行ってしまうということが起こるといえるのです。

しかもその図式化の仕事を脇で見ていた悟性が、この図式化の結果の中に、お得意の概念的思考で規則性を見いだしてしまう場合がある。いつもは悟性が指示を出していたのに、悟性の指示無しで両者のコラボレーションが成立してしまう状態です。自分が何かを頼んだわけでもないのに熱心に仕事をしている部下を見た上司が、部下の書いているレポートに目が行って、「君、それは何のレポートなの!? すばらしいじゃない!」などと感動する事態とでも説明すればいいでしょうか。

カントは⁽⁴⁾この事態を説明して、構想力が概念なしで図式機能を営むと言っています。その結果に悟性が規則性を見いだすわけです。概念を前提していないのに、対象に規則性が見いだされる。規則はなかったのに、まるで規則にしたがっていたかのように、「こうであるべきだ」と感じられるというわけです。これが美の正体なのです。

(國分功一郎『手段からの解放』(一部改変)による)

〔注〕 プラトン——古代ギリシアの哲学者。

アイデア界——プラトンの思想で、永遠不変の理想が存在する世界。

『判断力批判』——十八世紀ドイツの哲学者、カントの著した哲学書。

アクター——行為を担^{にな}うもの。ここでは比喩的に、心の働きそれぞれの役割を指す。

プレゼン——プレゼンテーションの略。人前で意見や考えを説明すること。

〔問1〕⁽¹⁾ (一) 趣味判断「このバラは美しい」と (二) 論理的判断「バラというものは一般に美しい」の違いについて見ていきましょう。

とあるが、趣味判断と論理的判断の違いについての説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 論理的判断は社会的な原理を前提として判断しているのに対し、趣味判断は個人的な経験から導かれる原理をもとに判断しているという違い。

イ 論理的判断は一般的な通念を前提として判断しているのに対し、趣味判断は通念を前提とせず、個別の対象をそれぞれ判断しているという違い。

ウ 論理的判断は経験から定義付けられたものによって判断しているのに対し、趣味判断は初めて見る対象に新たに定義付けられたものによって判断しているという違い。

エ 論理的判断は観念を前提とせず、個別の対象を一般的に判断しているのに対し、趣味判断は一般的な観念に基づいて判断しているという違い。

〔問2〕 の中に入る言葉として最も適切なのは、次のうちでは

どれか。

ア このような美の条件は文化によって異なるが、どの文化の条件も知り得ない

イ 美しさには明確な条件があり、その条件を満たすものだけが美しいとされる

ウ 人はそれぞれに美の条件を持っており、その条件が普遍的な美を作っている

エ これこれの条件を満たせば美しいと言える、そのような条件は考えられない

〔問3〕⁽²⁾ 美の場合は、構想力と悟性が主人公というわけです。とある

が、筆者は構想力と悟性がどのような力であると述べているか。

その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 構想力とは存在しないものを感覚的にとらえる力であり、悟性とは対象を概念にして理解し、そこからパターンを見いだす力である。

イ 構想力とは目の前にないものを頭の中に思い描く力であり、悟性とは対象を直感的にとらえて事態を理解する力である。

ウ 構想力とは失われたものを再び生み出す力であり、悟性とは対象を概念的にとらえ、一定の法則や秩序を見極める力である。

エ 構想力とはこれまでの経験をもとに未来を予測する力であり、悟性とは対象に自分なりの意味を見つけたす力である。

〔問4〕⁽³⁾ 認識のメカニズム とあるが、このメカニズムにおいて構想力はどのような働きをしているか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 現実の複雑な事象をまとめ、すでにある概念に当てはめて理解することによって悟性を支援している。

イ 複雑な要素を無数に含む現実から、情報を抽出し、正確に分析して結論を見いだしている。

ウ 概念になる前の段階で、現実をどう整理すればいいかという枠組みを考え、全体の見通しを立てている。

エ 個々の事実を論理的に分類し、そこから新しい法則性の型を導き出すことで、現実を概念化している。

〔問5〕⁽⁴⁾ この事態 とあるが、その内容として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 構想力が悟性の指示なしに図式化の働きをし、悟性が機能できなくなってしまうという事態。

イ 本来、悟性の指示に従って働く構想力が悟性を介さず、図式化を果たしてしまうという事態。

ウ 構想力独自に概念を作り出して、悟性が行う図式化とは異なる図式化を行ってしまうという事態。

エ 通常、構想力だけで行う図式化に悟性も加わり、ともに図式化を行ってしまうという事態。

〔問6〕 この文章の展開を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 最初に二つの判断を比べて「美しさ」についてその判断の矛盾点を説明し、次にカントを引用しながら認識の方法について述べ、最後に美しさを認識する仕組みに言及している。

イ 最初にバラの美しさについて二つの視点から説明し、次にプラトンやカントといった古典的な考え方を発展させて述べ、最後に具体例を交えながら美しさとは何かについて言及している。

ウ 最初にバラが一般的には美しいものであるという世間の認識を説明し、次にバラを美しいと認識するプロセスを哲学的な観点から述べ、最後に美しさとは何かという謎について言及している。

エ 最初に概念がなくても美しさを判断できる理由を説明し、次に悟性や構想力で人がどう経験を認識するかについて述べ、最後に美しいという認識は錯覚であることについて言及している。

〔問7〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「美の普遍性」というテーマで自分の意見を発表することになった。このとき、あなたが話す言葉を具体的な体験や見聞を含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

宣長の研究対象は万葉集だけではなかった。後世歌もまた研究の対象であった。研究対象であるということは、必然的に詠む歌の規範でもあるということである。だが、⁽¹⁾万葉集を詠歌の規範とする歌人は、後世風歌を詠むことに対して抵抗があった。そのことを宣長は「後世風をもすてずして」の自注の中で、次のように述べている。

今の世、万葉風をよむ輩は、後世の歌をば、ひたすらあしきやうに、いひ破れども、そは実によきあしきを、よくこゝろみ、深く味ひしりて、然いふにはあらず。たゞ一わたりの理にまかせて、万の事、古はよし、後世はわるしと、定めおきて、おしこめてそらづもりにいふのみ也。（中略）大かた此古風と後世と、よしあしの論は、いとゞ大事にて、さらにたやすくはさだめがたき、子細どもあることなるを、古学のともがら、深きわきまへもなく、かろくしくたやすげに、これをさだめいふは、甚みだりなること也。

——今の世で万葉風の歌を詠む者たちは、後世の歌を専ら悪いもののように責めののしるけれども、実はその良いか悪いかを十分に確かめ、深く味わい知った上でそのように言うのではない。ただ通り一遍の理屈を押しつけて、何事も古代が良い、後世は悪いと決め込んで、頭ごなしのあて推量に言うだけのことである。（中略）およそこの古風と後世風と、いずれが良いか悪いかという論はなかな

か大切なことであって、そうやすやすとは定めにくいわけがあることなのに、^{*}古学者は深く思慮をめぐらすこともなく、軽々しくこともなげに、このことを決めつけてしまうのは、⁽²⁾甚だ心得違いのことである。

万葉集を遵奉する国学者が後世風歌を忌み嫌うのは、その内実をわかつた上でのことではなく、時代が下るほど物事は劣悪になるといった一般的な法則を単純にあてはめているだけの愚行であると断罪するのである。このような考えに基づいて、宣長は後世風歌を詠み、後世歌を研究した。後世歌の研究の成果として、『草庵集玉箒』（明和五年刊）、『新古今集美濃の家づと』（寛政七年刊）、『古今集遠鏡』（寛政九年刊）などがある。また、後世風歌の実作も生涯を通して続けた。

このように万葉集の研究と古風歌の実作、そして後世歌の研究と後世風歌の実作、といった行為は果たして両立するのか。まず、研究に関して言えば、十分に両立させることはできるだろう。時代が異なるとはいえ、同じ和歌ジャンルのことであるから、共通する知識基盤を備えていれば、ある程度は応用が利くからである。だが、詠歌はどうか。⁽³⁾古風歌を詠むことと後世風歌を詠むことは両立するのか。また、両立するとすれば、それらをどのように習得すればよいのか。これらの難問に対して宣長は次のような回答を用意した。

さて吾は、古風後世風ならべよむうちに、古と後とをば、清く

これを分ちて、たがひに混雑なきやうにと、深く心がくる也。さて又初学うしまなびの輩ともがら、わがをしへにしたがひて、古風後世風ともによまんとせんに、まづいづれを先さきにすべきぞといふに、万よろの事、本もとをまづよくして後に、末に及ぶべきは、勿論もちろんのことなれども、又末よりさかのぼりて、本にいたるがよき事もある物にて、よく思ふに、歌も、まづ後世風より入いりて、そを大抵得て後に、古風にかゝりてよき子細もあり。

——こうして、みづから古風と後世風とを並べ詠むうちに、この古いにしえと後とをきつぱりと区別して、互いに混雑(4)しないやうにと深く心がけている。さてまた、初学の人々が教えに従つて、古風と後世風と双方を詠もうとするとき、まづどちらを先にすべきかといへば、何事もまず本もとを固めておいてから末に及ぶのが当然であるが、また末からさかのぼつて本に至るのがよいこともあるので、考えてみると、歌もまず後世風から入つて、それをたいてい会得えとくした後に古風に取りかかつてよいこともある。

宣長自身は古風歌と後世風歌を整然と詠み分けるといふのである。また、初学者に対しては、まず後世風歌の詠み方を習得した上で古風歌に移るといふ段取りを提示する。むろん、主義も方法も理論的には可能であるかもしれない。だが、実際のところ、このように器用に詠み分けることができるのか。それができなければ、たとえ理想を語つても、絵(5)に描いた餅である。

宣長は古風と後世風を詠み分けた。たとえば、出版された家集『鈴屋すずすのや』

集』に入集された歌の中から、同じ題を詠み分けているものを抽出してみよう。なお、後世風は「近調」とも称している。

□ (古風)

玉くしげ明けむあしたは(7)とく見てむ今宵の雪は五百重降りしけ

(鈴屋集・巻四)

□ (近調)

* 降るままに木毎の花も埋もれて今日は雲かとみねの白雪

(鈴屋集・巻二)

一首目の古風歌として詠まれた歌は、箱を開けるように明けてゆく朝を早く見てみたい、今宵の雪は幾重にも降り積もってくれ、というものである。この歌は「恋ひつつも今日はあらめど玉くしげ明けなむ明日をいかに暮らさむ」(万葉集・巻十二)と「池の辺の松の末葉に降る雪は五百重降りしけ明日さへも見む」(万葉集・巻八)の二首を組み合わせ模したものである。詞章だけでなく言葉の運びにおいても、万葉集に似せていると言つてよからう。

一方、二首目については、「雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅と分きて折らまし」(古今集・冬・紀友則)を踏まえて白梅が雪に紛れる近景を描きつつ、遠景では嶺の白雪を雲に擬えるものである。

雪を雲に見立てるのは古今集以来の表現であり、近調(後世風)を自称するのも理解できる。このように、「□」という一字題ではあるが、それをうまく古風と近調に詠み分けられていると言つてよい。このような古

風後世風詠み分け主義は、和歌に関する豊かな語彙や語法に加えて、詠み分けを実現しようとする強靱な意志があつてはじめて可能となる。宣長にそれができたのは詠歌に対する不動の信念があつたからであるう。

(田中康二『本居宣長』(一部改変)による)

〔注〕 宣長——本居宣長。江戸時代の国学者、歌人。

後世歌——万葉集より後の時代の歌。

古学者——古代日本の古典を文献によって研究する学者。

遵奉——尊重して従うこと。

『草庵集玉箒』(明和五年刊)、『新古今集美濃の家づと』(寛政七年刊)、『古今集遠鏡』(寛政九年刊)

——いずれも本居宣長の著した和歌の研究書。

『鈴屋集』——本居宣長の歌集。

降るままに木毎の花も埋もれて今日は雲かとみねの白雪

——雪が降るにつれてあの木この木と木ごとに咲いている

梅の花もすっかり雪に覆われてしまつて、今日は峰にか

かる白雪が雲に見えることよ。

擬える——例える。

〔問1〕⁽¹⁾ 万葉集を詠歌の規範とする歌人は、後世風歌を詠むことに對して抵抗があつた。とあるが、このことに對して宣長はどのような理由を説明しているか。その説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 万葉集を詠歌の規範とする歌人は、自らの感性に基づいて古代への信仰を説き、後世の利点には思慮をめぐらすことがないから。

イ 万葉集を詠歌の規範とする歌人は、通り一遍の理屈を押しつけて古代の良さを推奨し、時代の変化については軽視しているから。

ウ 万葉集を詠歌の規範とする歌人は、理想的な古代像を説明し、時代が下っていくにつれて環境が劣悪になると信じているから。

エ 万葉集を詠歌の規範とする歌人は、古代こそ理想的な時代であり、それから徐々に物事が墮落していったと決めつけているから。

〔問2〕⁽²⁾ 甚だ⁽⁵⁾ 絵に描いた餅 とあるが、本文中で述べられている「甚

だ」「絵に描いた餅」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。
それぞれ選べ。

⁽²⁾
甚だ

ア 決して

イ 総じて

ウ いつでも

エ 非常に

⁽⁵⁾
絵に描いた餅

ア あまり魅力的でない

イ とても素晴らしい

ウ 何の役にも立たない

エ 計画が破綻している

〔問3〕⁽³⁾ 古風歌を詠むことと後世風歌を詠むことは両立するのか。と

あるが、この問いに対して、筆者はどのように答えているか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 和歌に関する豊富な知識を持った宣長は、異なった時代の共通基盤を備えていたために研究については両立できたが、実作の両立は難問と言わなければならなかった。

イ 日本語についての豊かな語彙や語法を身につけていた宣長は、幅広い時代の作品を研究対象とし、特に万葉集に関する研究を継続させていたために、両立が可能であった。

ウ 歌を詠むことへの揺らぐことのない信念を持っていた宣長は、和歌に関する知識が豊富であり、詠み分けを実現させる強靱な意志を備えていたために、両立が可能であった。

エ 初学者に主義や方法を習得させるだけの理論を持ち合わせている宣長は、古風歌と後世歌を整然と詠み分ける能力があり、両立が可能であった。

〔問4〕⁽⁴⁾ ない と同じ意味・用法で使われているものを、次の各文の

——を付けた「ない」のうちから選べ。

ア まだ一度も海外旅行をしたことがない。

イ この車は故障して動かない。

ウ 雨が降っているわけではない。

エ おぼつかない記憶をたどる。

〔問5〕⁽⁶⁾ 同じ題 とあるが、三箇所のは には共通したことが入

る。そのことを和歌の中から一語で抜き出せ。

〔問6〕⁽⁷⁾ とく とあるが、その現代語にあたる部分を本文中から抜き出せ。

〔問7〕⁽⁸⁾ 雪を雲に見立てる とは、実際には存在しない雲を雪の美し

さと見なすという和歌の表現技法であるが、「雪を雲に見立て」た歌として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア うき雲のかつはれ行くと思ひしは降りつむ雪の光なりけり

(中島広足『檀園歌集』)

イ 昔^{すが}の根の長き春日になりぬれど空^{なま}猶^{なま}さえて雪はふりつ、

(安藤野雁『野雁集』)

ウ 雲雪に紛^{まが}ひもやらぬくれなるの薄花ざくら何にたとへむ

(井上文雄『調鶴集』)

エ いちじろく匂へるものを桜ばな雲か雪かと何まがふべき

(大田垣蓮月『海人の刈藻』)